

「男、突っ走る！」

第61回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (22)	『オフィスツリーイン』代表
木内 孝志 (51)	雅也の父
木内 真保 (49)	雅也の母
木内 健次郎 (18)	雅也の弟
安本 真苗 (57)	『スクエア・トラスト』代表取締役社長
藤澤 聡 (34)	カメラマン

1 木内家・居間（朝）

雅也、孝志、真保、健次郎が朝食を食
べている。

雅也「あれ、健。もう出なくて良いの？ 学

校遅刻するんじゃないのか？」

健次郎「（苦笑して）兄貴何言ってるんだよ、

今日は四月一日で土曜日。まだ春休み」

雅也「あ、そっか。春休みか」

孝志「こっちは休日出勤」

真保「同じく」

健次郎「八時半には出るけどね」

雅也「出かけるの？」

健次郎「クラスの奴と映画見てくる」

雅也「呑気な春休みでうらやましいわ」

孝志「そろそろ出ないと。行ってきます（と

出ていく）」

一同「いってらっしゃい」

2 同・雅也の部屋

模様替えがしてあり、応接用のテーブル

ルが置いてあり、一ヶ月予定表のホワイトボードが掲げてある――雅也が入ってくると、デスクに座り、パソコンを立ち上げる。

N「二〇一七年四月一日。専門学校を卒業した僕にとって、新年度が始まりました。卒業式直前に、地元の税務署に開業届と青色申告の手続きを済ませ、ついに文章執筆や脚本執筆を主な事業とする『オフィスツリイン』の、今日は記念すべき最初の日でもあります。といっても、会社や学校のように同僚や上司という存在もなく、自分ひとりで始まった新たな生活。SNSでは事業スタートの投稿を行い、早速月間予定を立て、また事業用の名刺を作り、これから本格始動をしていくところでした」

3 同・全景

4 同・雅也の部屋

雅也がパソコンで仕事をしている――

と、ノック音がする。

雅也「はい？」

と、真保の音がする。

真保の声「入るよ」

雅也「どうぞ」

真保「（入ってくるよ）ただいま」

雅也「おかえり。あれ、もうお昼？」

真保「そうよ。今日は休日出勤といっても半

日で終わったから、買い物も終えて帰って

きた」

雅也「（パソコンの画面を見て）本当だ、も

う一時過ぎてる。学校はさ、授業の始めと

終わりにチャイムが鳴るから、時間忘れて

作業してても、大体の時間は分かるでしょ。

それに、みんなもいたからね。お昼になっ

たり、夕方ぐらいになったら、休憩で自販

機に行こうとかって声かけてくれさ……も

うそういう同期もいないんだもんね」

真保「お昼、スーパーで赤飯買ってきた。一

緒に食べよ」

雅也「赤飯？ どうして？」

真保「今日はあんたの門出の日なのよ。朝はみんなバタバタしてたけど、せっかくの記念すべき日だと思ってさ」

雅也「（苦笑して）わざわざそんな大袈裟なことしなくても良かったのに」

真保「まあ良いじゃない。母さんがそうしたいんだから」

雅也「はいはい」

5 同・居間

雅也と真保が赤飯を食べている。

真保「これからどうするの？」

雅也「どうするって？」

真保「だって、ずっと家にいたって、仕事に来るわけじゃないでしょ」

雅也「うん。だからまずは、異業種交流会っていうのに出て、名刺配りまくろうかなと思っ
て。営業活動ってやつよ」

真保「できるの？」

雅也「やるしかないでしょ。普通の会社と違って、指示された仕事するだけってわけにはいかないだもん。自分で仕事を取ってきて、自分で仕事をして……全部自分でやらなきゃいけないだから」

真保「岐阜のおじいちゃんの遺伝かな？」

雅也「まあ、豆腐屋も自営業だもんね」

真保「八十歳になったのを気にお店畳んで、もう二年ぐらい経つでしょ。今思えば、よくやってきたなって思うもん。娘の私は、仕事のことなんて何も知らなかったからね。

普通に学校に通って、家があって、工場でおじいちゃんとおばあちゃんが仕事して。その光景が当たり前だって思ったけど、今のあるた見ると、おじいちゃんも仕事取ってきたりしてたんだろうなと思ってさ」

雅也「店閉めてから、じいちゃんって何してるの？ ギャンブルとか、特に遊びも知らない、仕事一筋の人じゃん」

真保「おばあちゃんの話だと、地元の草野球
チームで楽しくやってるみたいよ」

雅也「じいちゃん、球投げれるの？」

真保「そりゃ昔野球やってたからね。まあ、
体が覚えてるんじゃないの？」

雅也「まあ、ボケてないだけマシか」

真保「頭とか体使ってるうちは、大丈夫でしょ」
よ」

雅也「そうだね」

と、赤飯を頬張る。

6 同・雅也の部屋

パソコンで仕事をしている雅也——と、
スマホに着信が来る。

画面を見る雅也——藤澤からである。

雅也「（電話に出て）もしもし」

藤澤の声「お疲れ。おめでとう、メルマガ見
たよ。今日から事業開始だった」

雅也「そうなんです。無事に専門学校も卒業
して、今日から『オフィスツリーイン』ス

ターゲットです」

藤澤の声「ぜひ頑張つてよ。あ、そうそう。

電話したのはさ、前にYouTubeドラマの脚本
お願いしたことあったでしょ。明後日、新
作の撮影で大阪行くんだけど、良かったら
一緒に来ない？ もしスケジュールが空い
てればの話だけど」

雅也「（ホワイトボードに書きながら）大丈
夫ですよ。まだ事業始まってすぐで、スケ
ジュールなんて真っ白ですから」

藤澤の声「撮影そのものは明後日なんだけど、
明日の夕方に名古屋出発の高速バスに乗っ
て、夜に一度事務所に行くことになってる
んだよ。それでも良いか？」

雅也「ぜひ」

藤澤の声「了解。じゃあ、高速バス二人分、
予約しとくわ。また詳しいことは、メール
で送るから、確認しといて」

雅也「分かりました。じゃあ、よろしくお願
いします（と電話を切る）」

7 名古屋駅・バスターミナル（夕）

雅也が待っている——藤澤がやってくる。

藤澤 「お疲れ様」

雅也 「お疲れ様です」

藤澤 「早かったね」

雅也 「うちの地元から、名古屋方面の電車って三十分に一本しかないんですよ。だから、一本早い電車に乗ったら、ちよつと早く着いちやって」

藤澤 「そっか。（とチケットを渡して）はい、これチケット。俺と隣同士だけど良かったか？」

雅也 「一緒に行くんですから、何も別々にしなくたって」

藤澤 「（笑って）冗談だよ。緊張をほぐそうと思っさ」

雅也 「緊張？」

藤澤 「芸能事務所に行くの、初めてだろ」

雅也「まあ」

藤澤「気を楽しみましょうと思って」

雅也「すいません、いろいろお気遣いいただき
いて」

藤澤「まあ、そういうちよつと硬いところが、
木内ちゃんらしくて良いんだけどな」

雅也「藤澤さん」

藤澤「よし、行くか」

雅也「はいッ」

8 高速を走る観光バス

9 大阪・梅田駅（夜）

観光バスが到着する——バスの中から
雅也と藤澤が降りてくる。

雅也「久しぶりの大阪だあ」

藤澤「来たことある？」

雅也「確か一昨年の夏、家族旅行で」

藤澤「そっか。事務所は、この近くだ。社長
には、もう大阪に着いたことは連絡してあ

る」

雅也「はい」

10 『MKエンターテイメント』・事務所

藤澤に連れられて、雅也が入ってくる。

藤澤「失礼します。社長、藤澤です」

と、奥から社長・牧田が出てくると、

牧田「藤澤さん、お待ちしてましたよ」

藤澤「明日の撮影、よろしくお願いします」

牧田「こちらこそ」

藤澤「(牧田に)ご紹介します。去年の秋に、

ドラマの脚本を担当してくれた脚本の木内

君です」

雅也「(名刺を牧田に出すと)初めまして、

脚本の木内と申します」

牧田「(名刺を雅也に出すと)どうも、MK

エンターテイメントの牧田です。さあ、ど

うぞ、おかけになって」

雅也「失礼します」

と、応接用の椅子に座る一同。

牧田「いやあ、名前しか見てなかったの、
木内さんがどんな方と思ってたんですが、
こんな若い方だとは知りませんでした」

藤澤「この春に専門学校を卒業して、昨日か
ら新しく事業をスタートしたばかりなんで
す」

牧田「ほお、それは大したもんだ。専門学校
では何を学ばれてたんですか？」

雅也「シナリオを学んできました。でも、学校
の授業では他にも雑誌編集やデザインやプ
レゼンの授業もありました。全国規模に姉
妹校があつて、この大阪にも系列校がある
そうです」

牧田「専門的にシナリオを学ばれてたんです
ね。どうりで、藤澤君が仕事をお願いした
いというわけだ」

藤澤「名古屋で自主映画を撮ってるとき、木
内君にもスタッフとしていろいろ手伝って
もらったんです。行動力がある子だと、僕
が見込んでます」

牧田「そうでしたか」

雅也「明日の撮影、もしよろしければ何かお手伝いしましょうか？」

牧田「手伝い？」

雅也「撮影の見学にお邪魔するといっても、見てるだけで何もしないっていうのも……お恥ずかしい話、貧乏性なもので、何かやってないと落ち着かないタイプなんです」

牧田「（笑って）それはありがたい。実は恥ずかしい話、うちで企画してるYouTubeドラマは、撮影スタッフが少なくて、キャストも最小限でやってる、小さなドラマです。なので、当日のスタッフも最小限なので、どうしても人手不足なんですよ。雑用みたいになってしまいますけど、もしそれでも手伝っていただけるのなら、ありがたいです」

雅也「はい、ぜひお願いします」

出演者の若手俳優と女優がスタンバイをしている——カメラを抱えている藤澤。その後ろで様子を見ている牧田、他数名のスタッフ。

カチンコを持った雅也が、カメラの前に来る。

雅也「シーン四、テイクワン、よーいスタート」

と、カチンコを鳴らし、藤澤の後ろに移動する。

N「翌日の撮影では、実質的に助監督のような立ち位置で関わることになりました。映像撮影の現場は、かつて専門学校時代に行った自主ドラマや、藤澤さんと共に撮影した自主映画で雰囲気を感じていたので、差し当たって困ることはありませんでした」

12 お好み焼き屋（夜）

お好み焼きをひっくり返す雅也——その様子をスマホで撮影している藤澤。

雅也「おお、できました」

藤澤「結構上手くできてるじゃん」

雅也「これも遺伝ですかね？」

藤澤「あれ、木内ちゃん、大阪に親戚いるの？」

雅也「父方の親戚が、泉佐野市ってところに住んでるんです。それに、父親の実家は広島ですから、お好み焼きには結構うるさくて」

藤澤「広島風には、確か麺が入ってるんだろ」

雅也「そうなんです。あ、でもその『広島風』っていうの、決して広島県民や出身の人前で言っちゃダメですよ」

藤澤「どうして？」

雅也「お好み焼きって言うのは、そもそもが広島発祥の地なんです。だから、元祖である広島のお好み焼きに、『広島風』ってつけるのは、うちの父親曰く、タブーなんですって。『関西風』はオツケーらしいんですけど」

藤澤 「広島県民のプライドってわけか」

雅也 「だと思えます」

藤澤 「次、大阪に来るのはいつになるかな：
…」

雅也 「またスケジュールが合えば、同行しますよ。撮影スタッフというか、お手伝いだったらいつでもやりますし」

藤澤 「それなんだけどさ…」

雅也 「？」

藤澤 「あのYouTubeドラマの制作、来月末で終了するんだよ」

雅也 「え…？」

藤澤 「今回、木内ちゃんと一緒に連れてきたのは、せめて一度だけでも、牧田社長やスタッフの人たちに紹介してあげたいと思っ
たからだったんだよ」

雅也 「そうだったんですか…」

藤澤 「ごめん、もっと早く伝えとけば良かったな」

雅也 「いえ。先方の都合ならばしょうがない

ですよ。それでも、僕は藤澤さんの紹介で、YouTubeドラマの脚本も担当させていただいて、実績にもなったんです。それは今でも感謝してます。そりゃ、僕がこのYouTubeドラマの脚本を書く機会はないってことは、残念ですけど」

藤澤「再生回数もそんなに伸びてないし、そこまで話題にもなっていないみたいで、来月末で一旦制作を終えることになったらいいんだ」

雅也「再生回数のこと、正直気にしてたんですよ。だって、再生回数順に並べ替えたら、僕の担当した二つとも、結構下のほうでしたから」

藤澤「数字は嘘つかないもんな……」

寂しそうな顔でジョッキのビールを飲む雅也。

N「せっかく脚本家としての仕事をもらえた取引先と思っていただけに、制作終了の知らせは、僕にとって大きな衝撃でした。脚

本依頼もなくなったことで、自然と藤澤さんとは疎遠になり、その後二度と連絡を取ることがありませんでした。愛知に戻ってから、しばらく経った後、僕は『なご弁新聞』の制作でお世話になった安本社長からの連絡を受け、人事採用ツールとして使う紙媒体の記事執筆の仕事をいただくことができたのですが……」

13

『スクエア・トラスト』・事務所

安本が不機嫌そうに電話で話している。

安本「木内君、今メールで原稿見たけど、何あの内容？　こんなんじゃないやお話になりません。フリーペーパーと違って、今回の案件は、クライアントからお金をいただいて制作する紙媒体なの。『なご弁新聞』みたいに、人に取材をして自由に書くスタイルとは訳が違うの。もちろん連載小説とも違ってね。今回の読者ターゲットは、高校生や大学生がメインで、その会社に入りたいと

思うようなことを書かなきゃいけないのよ。
『会社に入って辛かったこと』なんて、こんなネガティブな表現が続くようなもの、載せられるわけないでしょう。確かに、取材の時は、インタビューした社員さんが苦労話をしてたけど、それをダラダラと正直に書いてどうするの。これじゃ、かえってイメージダウンになって採用ツールにも何もならないでしょ」

14 木内家・雅也の部屋

スマホを持ったまま、安本の電話を陰しい顔で聞いている雅也。

安本の声「ネガティブな表現は極力避けること。それから、高校生や大学生という読者ターゲットのことを考えて言葉選びをすること。先方が使ってた言葉をそのまま使ったところで、業界や社内の専門用語なんて、高校生や大学生が分かるわけないでしょ。木内君自身、それから木内君の弟が読者に

なることを考えてごらん。絶対今の状態の文章じゃ、理解なんてできないわよ。構成からきちんと組み立てて、すぐに書き直してね。先方のチェックもあるから、そんなに直す時間なんて取れないんだから。頼むわよ、こっちだって木内君にライターとしてお金払ってお願いしてるんだから。良いわね」

雅也 「はい……」

と、重々しく電話を切ると、パソコンの画面を立ち上げる。だが、原稿が進まず、キーボードの手が何度も動いては止まっている。やがて大きな溜息をついて、ベッドに横たわる。

N 「『なご弁新聞』を作っていた時も、安本社長から指摘や忠告を受けたことはありましたが、こんなにも長く叱られたことはありませんでした。『仕事の失敗は仕事で取り返す』という言葉は聞いたことがありましたが、だからと言って信頼を取り戻すの

は容易ではないと、僕は実感していました。これまで何とかやってこれたのは、添削やアドバイスをしてくださっていた講師の先生方の存在があったから。その存在がない今、自分ひとりで最後まで書き切るということは、至難の業に近いものでもありません。それでも、これからは一人でやっていた。それでも、これからは一人です。かなければいけない……事業を始めてまもなく一ヶ月が経とうとしている中で、僕は今、自身の経験値の浅さを痛烈に実感し、やはり事業を始めるのは早かったのかと悩み、今後の行く末が不安になる精神状態が続くという、これまでに経験したこのない大きな壁に直面していました」

つづく